山の学校 <山びこ通信・号外>

2004.10.2 発刊

―小学生から大人までの学校です。

幼稚園の放課後の時間を利用した、学校法人北白川学園の「新しい教育」の取り組み、
小学生から大人までを対象とした「学びの場」、それが「山の学校」です。

平成１６年度の時間割（秋学期）

（各クラス５名まで）

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん低学年 しぜん高学年 ことば高学年Ａ かず中級	ことば高学年Ｂ	中１英語の基本 日本語の読み書き（高 1~3）	英語の読み書き（高 1~3） 数の世界（高 1~3）
水	ことば低学年 ことば中学年			ラテン語
木	かず初級 かず上級		中２英語の基本 数と自然（高 1~3）	中２数の基本
金	やまびこクラブ（月末）		青春ライブ授業！（7:00～8:30 月１回）	ラテン語

小学生の部

『ことば』	低学年（1･2 年）	山下一郎
	中学年（3･4 年）	宇梶卓
	高学年 AB（5・6 年）	N先生
『しぜん』	低学年（1･2 年）	山下太郎
	高学年（3～6 年）	山下育子
『かず』	初級（1･2 年目安）	宇梶卓 / 山下太郎（隔週制）
	中級（3･4 年目安）	福西亮馬
	上級（5･6 年目安）	宇梶卓 ／ 福西亮馬（隔週制）

講師が「――」のクラスは、希望者を５名まで受け付けます。希望者がいる時点から、上記の講師たちによる新しい授業が展開されます。

中学生・高校生（一般）の部

『日本語の読み書き』	中(1～3)	――
『英語の基本』	中１	Fujita
	中２	山下太郎
	中３	――
『数の基本』	中１	――
	中２	下村昭彦
	中３	――
『日本語の読み書き』	高(1～3)	――
『英語の読み書き』	高(1～3)	Fujita
『数と自然』	高(1～3)	下村昭彦
『数の世界』	高(1～3)	福西亮馬
『ラテン語』	一般	山下太郎

＊　詳しくお尋ねになりたい方は、いつでもお気軽にご連絡ください。

「山の学校・北白川幼稚園」 TEL:075-781-3200

＊　クラスの見学も随時行っています。（場所：北白川幼稚園内）

ホームページ http://www.kitashirakawa.jp/yama.html　電子メール　taro@kitashirakawa.jp
ウェブログ http://www.kitashirakawa.jp/~taro/yama/　電話 075-781-3200 ／ FAX 075-781-6073

「山の学校」・生徒募集中！

小学生のクラスは、「かず」・「しぜん」・「ことば」の、どのクラスも楽しく元気に、勉強に取り組んでいます。それぞれのクラスの生き生きとした様子は、「山の学校」の **ウェブログ**（http://www.kitashirakawa.jp/~taro/yama/）をぜひご覧下さい。

中・高生のクラスについては、**「青春ライブ授業！」**でおなじみのスタッフ（小学生クラスも担当）が勉強のこつを直伝しながら、学校の勉強に対するきめ細かいフォローを行っています。

ただ、それにとどまらないのが「山の学校」の勉強。その ＋α についてお話しますと…。

中・高生のみなさんが、高校や大学に進学してからもなお、やる気を持って力を発揮していくには、受験勉強の答え合わせに終始しているだけではいけません。自分が本当に興味を持っていることは何か？　よく考えれば、大学の勉強の先取りをすることだって可能だし、そうした勉強は何より楽しいはずです。

この「先取り勉強」とは、例えば読書であり、テーマを決めての小論文です(英語のクラスならこれを英語で行う)。小論文とは、自分の考えを文章で表現することですが、これを敬遠していてはいけません。また、自分が書いた内容を人の前で発表し、意見交換することも大切です。

読書、小論文（レポート）、意見交換・・・どれもが大学生にとって大切な勉強の基本のはずですが、現実にはこれらの「先取り勉強」をないがしろにしている人が大半です。
その結果、大学に入ってから勉強につまづいたり、目標を見失ったり、不登校に陥ったりする学生が少なくありません。希望の大学に入学することは大切ですが、入学してからますます力を発揮していくことはもっと大切なことです。

「山の学校」ではこのような考えに基づき、各クラスの定員を **５人まで**とし、「日本語の読み書き」のクラスを中心に大学の「先取り勉強」を支援していきます。目の前の勉強をどうこなしていくのか、それに加えて、大学の「先取り勉強」をどのように実現していくのか？
こういったことについて、詳しくお尋ねになりたい方は、いつでもお気軽に「山の学校」までご連絡ください。クラスの見学、体験授業の受付も随時行っています。

青春ライブ授業！

――今、中・高生に語りたいこと――

山の学校では、講師の大学生・大学院生を中心に、**リレー式の授業** を開設しております。中学生・高校生・ご父兄で、**無料** で参加していただけます。普段親子の間では交すことの難しい**「勉強の大事さ」**という話題を、本物の大学生・大学院生の目線から熱く語ってもらう９０分間です。

各講師には、自分の中学生・高校生時代の勉強を振り返って頂き、またスライドなどを通して、今大学（あるいは社会）で取り組んでいる勉強の魅力を、中学生・高校生にもわかりやすく伝えてもらいます。

ご父兄も、どうぞご遠慮なく輪の中にお入り下さい。むしろ熱意のあるご父兄こそがこの場の影の主役なのかもしれません。つかの間、青春時代にタイムスリップしていただくと同時に、お子さまの未来を考える上での貴重な時間を、ほかならぬお子さまご自身と共有できる点に意義があろうかと存じます。

中学生・高校生向け『ことば』のクラスに期するもの

山下太郎

言葉の教育について言えば、（１）言葉を使って自分の絵を描く経験（塗り絵ではなく）が大切であると思われますが、（２）現実の教育の場面ではその機会がほとんどなおざりにされているように見受けられます。

もちろん、言葉にならぬ感動をできるだけ多方面に渡って蓄積しておくことが、言葉の表現に親しむ大前提になります。その意味で、幼稚園、小学校時代の「生（なま）の経験」の大切さについては、いくら強調してもしすぎることはありません。園児は――たとえば自分が鉄棒や竹馬に一生懸命取り組んでいる姿を見てもらおうとして――「ねえ見て見て！」と自分の経験を力一杯大人に訴えます。
小学生も同じです。自然にふれ、目にするものは何でも口に出して教えあう――「ワっ！ダンゴムシ見つけたゾ！」――などなど（「山の学校」の小学生を見ていると、特にその感を強くします）。

さて、教育に話を戻しますと、子どもたち（とくに幼稚園児）は、まだ自分で本がうまく読めません（黙読・音読ともに）。それで、当初は親や先生にたいして「ねえ読んで！」とお願いすることで、子どもたちの読書経験はスタートします。子どもは本を読んでもらうことが大好きです。同じ本を飽きもせずに「もういっぺん（読んで）」とお願いします。「じゃあまた明日」というと、その約束を心待ちにしています。

こうして、じゅうぶんに本を「読んで」もらった子どもたちは、やがて自分自身の力で片端から本を読むようになります。言い換えますと、本を開くことで、未知の言葉の世界、ひいては人文学や自然科学等、大学の学問につながる抽象的な言葉の世界に向かって探検を始めます。最初は受動的に始まった子どもたちの「読書経験」ですが、やがてはそれが能動的な「読書経験」に変わっていくのです。そしてさらには、本を読んで得た感動や発見を、今度は「ねえ、聞いて！」と他者に伝えたくなってくる、ここがポイントです。
では、こうした子どもたちの言葉を、どれだけの大人が丁寧に引き出し、かつそれを真剣に「聞こう」としているでしょうか。

冒頭で書きましたとおり、自分の考えや感動を文章によって表現する修練は、多感な中学、高校生にうってつけの学びの機会を与えます。幸い「山の学校」では、「青春ライブ授業！」でおなじみの若き情熱溢れる先生達が、子どもたちの知的好奇心を守り育てたいと――つまり、本物の「ことば」の勉強を共にしようと――手ぐすねをひいて待っています。

ぜひ、一人でも多くの中学生、高校生が「ことば」のクラスに参加され、言葉の表現に磨きをかけるとともに、みなの前でそれを発表する喜びを分かち合って頂きたいと願っています。

『日本語の読み書き（高校生）』

（火曜日 6:40～8 :00 ）　　担当　N先生

ことばのクラス、秋学期が始まりました。

春学期同様、ひとつのテクストを軸として、多種多様な文章に触れる機会を作っていきます。小難しい文章に対しても「食わず嫌い」を無くすことが、読解力や思考力の基礎を作り上げていくのであり、夥しく文字情報が押し寄せてくる時代であるからこそ、一字一句を疎かにしない正確な読解を常に心がけることが必要とされています。

さて、秋学期からは小学生クラスに加えて高校生のクラスを担当することになりました。

高校生クラスでは、①読解力（さまざまな文章を読みこなす力）、②思考力（さまざまな角度から対象を把捉する力）、③記述力（得たこと考えたことを説得的に示す力）を訓練します。小学生クラスでは主に読解が中心となっていますが、高校生クラスでは、特に毎回の授業で大学入試までを視野に入れた小論文指導を行います。

テクストは、小著ではありますが、プラトンの著作である『メノン』を選定しました。小論文は主としてこのテクストに基づいた論題で記述します。難解ではないのか、と問われれば、そうでもないし、そうでもある、と答えることになりましょう。『メノン』の主題は「徳とは教えることができるものか」というもので、形而上的・抽象的なことが苦手な方はすぐに拒絶反応を起こしてしまうようなテーマかも知れません。しかしながら著作の中で述べられているのは非常に具体性に富むもので、通常曖昧模糊として掴み所の無いもののように考えられがちな「徳」のイメージを覆すような行論となっています。

「覆す」と述べました。これが重要です。

授業では、まず何も見ずに質問文（『メノン』からの引用文）に対して自分の考えを記述します。この際、講師である私自身も同じように小論文を記述します。その後、『メノン』の該当箇所を読み、最後に生徒と講師が互いの小論を読み合い質疑応答を行う、という流れです。著作中では、ソクラテスとメノンとが上述の主題について対話をしています。その対話の中に自らも参加してみる、とも言うことが出来るでしょう。そして、自分が書いたこと（＝自分の考え）と、テクスト、他の人の書いた小論を読み比べることによって、はじめに抱いた固定概念を打ち砕いてゆくという経験をします。

かつて『山びこ学校』を編んだ無着成恭は、これを「概念くだき」と呼びました。プラトンは著作の中で、メノンの固定概念を打ち砕かす役をソクラテスに当てています。と同時に、授業では我々も彼等の会話に参加する訳ですから、ソクラテスは我々の固定概念をも打ち砕いて行きます。そこで短絡にも「徳」とは何であるかを知ろうとするのは無意味です。それは片言隻句で不充分に定義されたものに過ぎないでしょう。

蓋し、「徳」とは何であるかは、打ち砕かれた固定概念を拾い集め、今度は違ったやり方で新たに構築し直して行く過程（＝思考する過程）の中で、包括的に体得されてくるものと考えます。それは受動的姿勢では得ることは出来ません。幅広くアンテナを張り、積極的に知識を得、断片的知識の間に有機的関連を構成する意欲。砕け散ったままでいないという気持ちが大切なのだろうと思います。

『英語の基本（中１）／英語の読み書き（高校生）』

（木曜日 6:40～8 :00 ／ 8:10～9:30）　　担当 Fujita

英語の授業では中学生、高校生とも各一クラスずつ担当させていただいております。

現在、中学校のクラスでは基礎をしっかり身に付けてもらうことを考えて授業を行っています。
英語や数学といった勉強は基礎の上に基礎を重ねて積み上げていかなければならないという難儀な性質を持っています。つまり家を建てる場合と同じで、どこか一箇所の組立を間違えてしまえば、その上に積み上げることができなくなってしまうのです。
例えば、一般動詞を使った文を組み立てることができなければ、関係代名詞の用法を理解することができるはずはありません。また、分詞構文というややこしい文法事項がありますが、そのことを理解せずに独立分詞構文というより複雑な事項を理解することはできません。

過去の日本の英語教育は文法偏重型と呼ばれ、「読み書きはできるけど会話ができない」と批判されてきました。しかし、一度会話を偏重し始めて、会話はちょろっとできるけど書いてあるものはまったく読めない、英語で文章を書くなんてもっての外という状態になっては意味がありません。
英語を話すということは従来の英作文のスピードを速めた状態と言えます。だからこそ、基礎的文法を大切にしてじっくりと積み重ねていく練習を重視した授業を行っています。

文法的なことと並行して、授業中は細かい発音指導も行っています。日本語を母語として育って、ある程度の年齢に達してしまうと、耳でいくら聞いても英語の発音はうまくなりません。
母語の音声は人間の耳に大きく影響し、ある音とある音とを融合して一つの音のように聞かせてしまうことがあります。よくある例えですが、日本人はＬとＲの音の区別がつかないと言われます。これは「ラッパ」ということばを「LAPPA」と発音しても「RAPPA」と発音してもまったく意味上の違いがないため脳が同じ音のように聞かせてしまいます。

そこで、まったく同じに聞こえる単語を見様見まねならぬ、聞き様聞きまねで発音したとしても同じように聞こえるはずがありません。そこで、英語を母語とする人の口の動きを専門的に分析した結果を利用して、いかにして同じ音を再現するかにこだわって指導しています。日本語では意味の違いをなさない音の違いでも、英語では重要な違いになりえます。口の形の図解や実演を利用してわかりやすい発音指導に取り組むようにしています。

一通りの基礎的な文法を学習し終えた高校生のクラスでは、読むことを中心に授業を進めています。現在は生徒の希望で、夏目漱石の『こころ』の英訳版を精読しています。
現在の日本の教科書の大部分は、日本人の著者が書いたものをネイティブスピーカーが手直しするという方式で作られています。つまり、英語を書いているのが日本人ということになります。母語でない言語で書かれた文章は一般に読みやすいとされており、英語の教科書も例外ではありません。

しかし、実際に英語を読む場面では、英語を母語とする人によって書かれた文章が多いはずです。Kokoro の著者は日本人ですが、実際に英語を書いている訳者はアメリカ人ですので生の英語に触れることができます。また、英米文学に直接触れようとすると、どうしても英米の文化の理解を欠かすことができず、初期段階では英語力向上の妨げとなってしまいます。
そういう点でも、日本文学ならば障害を最小限に抑えて、英語力のみをネイティブの英語を使って効率的に磨くことができると考えられます。

『数の基本（中２）／数と自然（高校生）』

（木曜日 8:10～9 :30 ／ 6:40～8:00）　　担当　下村昭彦

$$x = \frac{\sqrt{5}+1}{2}$$

これは、二次方程式$x^2 - x - 1 = 0$ の解のうちの一つです。高校１年生で習う解の公式さえ知っていれば、誰でも解ける問題です。では、この数字の意味するモノは?

数学とは、数や式の意味を追求する学問です。この数字が何を意味するのか、この数式は何を意味するのか。そして、物事を数式で表すことでより理解を深めようとする学問です。
お見せした数には二つの意味があります。その一つは、フィボナッチ数列(1，1，2，3，5，8，13，21，…と続く数列)のある項とその前の項の比の極限です。そして二つ目の意味は黄金比です。

今の学校教育では、残念ながらこの二次方程式の解き方を習う際に、この式が何を意味しているのか、ということを習うことはありません。しかし、フィボナッチ数列について考えるとき、黄金比について考えるとき、この方程式が解けなければその数の意味に辿り着くことができません。計算練習ほど面白くないことはありませんが、計算力ほど数学について考える上で重要なこともありません。いくら面白いアイデアが生まれても、計算力がなければその考えを発展させることができないからです。

数学のクラスでは、数学のおもしろさや数式の意味を知ってもらうこと、そして自ら数学を学びたいと感じてもらうこと、を最終目標としています。

中学校２年のクラスでは、主に中学１年生の復習と授業の先取りをメインに行っています。中学の数学では文章題もさることながら、計算問題の練習が特に重要です。数学においては理解し、式を立てることこそがもっとも重要ですが、計算し解答まで導かなければ理解を活かすことができません。にもかかわらず、計算問題はおろそかになってしまいがちです。

そこで、このクラスでは計算問題にも力点を置き、文章題などの発展問題に進んだときにも計算でつまづいて数学を面白くないと感じることのないよう注意しています。また、わからないところがあれば理解できるまでとことんつきあっています。数学嫌いを防ぐには、数学を面白いと思ってもらうことこそが最も重要です。生徒に数学を面白いと思ってもらえるよう、工夫を重ねていきたいと考えています。

高校生のクラスでは、学校の範囲を超えてより発展的な内容に触れることを心がけています。現在の入試制度のもとでは、残念ながら教科書だけでは入試問題に対応することができません。ですが、入試問題は現実的な社会的・工学的・理学的問題と密接に関わっていることが多いのです。数学的な問題が実際に生活の中で活かされていることを知ってもらえれば、数学を好きになってもらえるはずです。また、思考ゲームとしての数学のおもしろさ、すなわち論理的思考法を習得してもらうことも目指しています。論理的思考は、文科系・理科系問わず、問題解決の際に必ず必要となる能力です。数学を通して、順序立てて物事を考える技術を身につけてもらいたいと考えています。

いつか、子どもたちが無限の地平にたどり着けるように。

『英語の基本（中２）』

（木曜日 6:40～8:00）　　担当　山下太郎

私は語学の勉強はスポーツの練習と似通っていると思っています。誰もが分かっていると思っている中学１年生の勉強。これをどう取り組むかというと…。

１）教科書を何度も正確に発音する。（自分流でごまかさない）
２）教科書の文字を正確にノートに写し取る。（１で練習した通り発音しながら写し取る）

これが実に大切で、案外カンマやピリオドが抜けたり、勝手に空想の単語を作り出したり…。このとき、本人の提出したノートの隅々まで目を光らせて赤ペンを走らせます。ひとつひとつのミスについて、丁寧に説明しながら。

３）そして、いよいよ自信がついたら教科書を見ないで、教科書の英文をノートに再現します。

要は丸暗記をしてもらうわけです。自分の力だけで２）と３）の練習はできるはずです。（私はこれを中学１年から高校３年まで続けました。）どんな教科書でも、すべて「完全に」教科書を見ないで、教科書通りに「再現する」！　やればできますが、いきなりは難しい。これがスポーツ的な練習だと思うゆえんです。実力は絶対つきます。

『数の世界（高校生）』

（火曜日 8:10～9:30）　　担当　福西亮馬

このクラスは「もっと数学をしたい人」向けです、などと書くと、非常に門戸が狭くなりますので、ずばり「数学を好きになりたい人」向けと銘振って、ご紹介させていただきます。

クラスでは主に日本数学オリンピック（JMO）で出題された問題をテーマとして扱っています。これは、せっかく学校で学んできた数学的知識を、砂上の楼閣ではなくて、自分の力でしっかりと再構築する練習です。JMO の問題は、「自分の物である」と確実に知っている知識でないと解けませんから、不確実な物を知って、再勉強するといういい循環が生まれます。
また授業の最初には、英語で書かれたテキストを触っています。こうしたオマケもまた重要で、これは「大学生になる」気持ちを先取りするためにしています。たとえば、

Exercise　　Proof the following formula:

$$2^n - 2 = 2 + 2^2 + 2^3 + 2^4 + \cdots + 2^{n-1}. \quad \text{(see Hint)}$$

というような文章です。なあんだ、と思われませんか？　勘のいい人は、もし単語を知らなくても、ああ、proof は「証明する」のことかな…あるいは、formula は「式」のことかな？　と思われるでしょう。これが実際、将来に大学でするはずの勉強なのです。そして今は、江戸時代の偉人、杉田玄白になったような気持ちで（彼の場合は医学と蘭語でしたが）数学とも英語とも付き合っていこう、というのが狙いなのです。
さて、上の問題にはヒントが付いています。見ても全然構いません。一度挑戦してみて下さい。きっと、なるほど、あ、そうか！　と「ガッテン」していただけると思いますよ。

Hint: Divide $(x^n - 1)$ by $(x - 1)$.

『高校生・日本語の読み書き』（冬学期以降の予定）

2004 年度・冬学期

＜古文の読解と実践小論文　または　現代文の読解と実践小論文＞

生徒と講師との間で、ふさわしいテーマを以下のうちから決めていく予定です。初めての方は、そのつど希望に沿うよう進度調整を行います。

Ａ［古文の読解の場合・テクスト候補（どれかひとつ）］

毎回の授業でかなりの予習が必要となります。冬学期の授業では一冊は終わらないかと思われます。

菅原孝標女（西下経一校註）	『更級日記』	岩波文庫
作者不詳（大槻修校註）	『堤中納言物語』	岩波文庫
久松潜一・久保田淳校註	『建礼門院右京大夫集―付平家公達草紙』	岩波文庫
鴨長明（市古貞次校註）	『新訂　方丈記』	岩波文庫
新井白石（松村明校註）	『折たく柴の記』	岩波文庫

Ｂ［現代文の読解の場合］

毎回異なった文章を読み、多様な文章に対する正確な読解を行います。
テクストはコピーを配布します。予習は必要ありません。

Ｃ［実践小論文］

秋学期に習得した小論文の基本を使った応用編。

2005 年度・春学期

＜漢文の読解と現代文に関する総合的対策Ｉ＞

Ａ［漢文の読解］（未定）

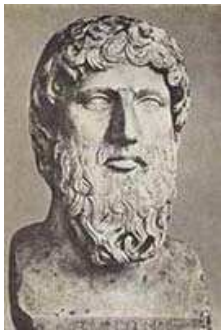
小川環樹・西田太一郎	『漢文入門』	岩波全書
小川環樹訳注	『老子』	中公文庫
金谷治訳注	『荘子（1-4）』	岩波文庫

Ｂ［現代文に関する総合的対策Ｉ］

読解と要約作成・小論文の仕上げと「味読」をいたします。

＊2005 年夏・冬学期は「現代文に関する総合的対策Ⅱ」と「古典に関する総合的対策Ｉ＆Ⅱ」を予定しています。

日本語の読み書き



『ことば』クラスの中学生・高校生向けである、『日本語の読み書き』は随時生徒を募集しています。体験無料ですので、ご興味のある中学生、高校生の方は、ぜひ一度ご参加ください。

中学生（＊曜日）pm６：４０～８：００
高校生　火曜日　pm６：４０～８：００

＊中学生のクラスの曜日・時間帯はご相談に応じます。

中学生・高校生向けの『ことば』のクラス、それが『日本語の読み書き』です。(1) 文章を正確に読む練習（読解）(2) 自分の意見を文章によって表現する練習（小論文）(3) 意見交換する練習（対話）を中心の課題とします。実際には一人一人のお子さんと対話しながら、ふさわしいテーマを決め、読む本、書く内容を選んでいきます。
自分の考えを文章によって表現する練習は、生徒が表現した、一つひとつの文章を大事に見守ろうとする先生とのきめ細かいやりとりによって実現されるものです。このクラスではマン・ツー・マンに近い形で一人一人の言葉を大切にし、表現の喜びを共有したいと考えています。